

哲学者井上忠の生涯：誕生から最初の論文の完成まで

伊 佐 敷 隆 弘

はじめに

井上忠^{いのうえただし}は2014年（平成26年）9月20日に88歳で亡くなった。ギリシア哲学の研究者として、そして、それ以上に、哲学そのものの独自の追求者として、重要な仕事を残した。本稿において、井上忠がどのような生涯をたどったのか、明らかにしたい。井上忠の哲学それ自体については、拙論「根拠と経験——井上忠の哲学を『ギリシア哲学解釈』という枠からははずす¹⁾」で既に論じた。本稿の目的は、井上哲学の背後にどんな人生があったかを明らかにすることによって、拙論を補うことである。まず、誕生から最初の論文の完成（27歳）までを取り上げる。

目 次

- I 誕生から旧制一高生時代まで
 - 1 死の問題
 - 2 一高入学
 - 3 自己の問題と絶望
 - 4 神秘体験
- II 法学部から文学部へ
 - 1 一高を卒業して法学部へ
 - 2 原爆体験
 - 3 哲学への決意
- III 哲学科入学から最初の論文まで
 - 1 アリストテレス『形而上学』との出会い
 - 2 森有正との対話
 - 3 カトリックへの改宗
 - 4 最初の論文の完成

¹⁾ 哲学会編『根拠・言語・存在』（哲学雑誌，第131巻，第803号）有斐閣，2016年，pp. 76-97.

I 誕生から旧制一高生時代まで

1 死の問題

井上忠は1926年(大正15年)3月25日に広島県呉市くれに生まれた²⁾。呉は日本海軍の造船所として栄えており、有名な戦艦大和やまとはここで作られた。井上の両親は二人とも小学校の教員だったので、井上は生後40日目から小学校入学まで、昼間は隣のNさん老夫婦のもとに預けられた。Nさん夫婦は熱心な浄土真宗門徒で、大きな仏壇ぶつぼんに毎朝、仏飯を供え、念仏を唱えた。幼い井上は、二人のあとをチョコチョコと付いていった³⁾。二人に連れられて寺参りをするのもしばしばだった⁴⁾。

「真宗というのは私にとっては、生まれながらの空気みたいなものです⁵⁾」と井上は語っている。真宗だけではない。「身体がひ弱かったせいもあって、『人の道』だとか谷口雅春たにぐちまさはるの『生長の家』だとかへも、ひとにすすめられたり、母に連れられたりして出入りしていた⁶⁾」と言う。

「人の道」は、1924年(大正13年)に御木徳一みきとくはるによって設立された神道系の新宗教である。1937年(昭和12年)、井上が11歳のときに政府からの弾圧によって解散しているから、井上が「人の道」へ行ったのは11歳より前のことだと考えられる。また、「生長の家」は1929年(昭和4年)、井上が3歳のときに設立された神道系の新宗教である。

ちなみに、井上の新興宗教好きは生涯変わらなかったようだ。59歳のとき、こう語っている。

「僕は小さい時から宗教は大好きでした。浄土真宗のお爺さんお婆さんに子守りをしてもらって育てられた。だけど、別に門徒になったわけではない。だから特殊宗教形態というものには、僕はかなり冷酷なんです。逆に言うとなんだか形のきまらない新興宗教は大好きです。もう新興宗教があると出かけていって覗かなきゃ気が済まない。ほんとかな、なんて言ってね⁷⁾。」

宗教的な雰囲気の中で育ったせいか、幼い井上は死ぬのが怖かった⁸⁾。

「数え年五歳と六歳のとき、一度ずつですが、夢に阿弥陀さまあみだが現われて、お前は五つで(次の年には、六つで)死ぬと言われ、ひとりで死ぬ淋しさ怖さに夜中に目覚めてふるえました⁹⁾。」

しかし、大人たちは死の問題に対して平然としているように思われた。

「ひとはみな死ぬ筈なのに、平気な顔で生きている大人たちが不思議で仕方がなかった。いく度か質

2) 「井上忠先生年譜」『追悼集』2014年、p. 101。山本巍東京大学名誉教授によると、この年譜は井上自身が作成した履歴書に基づいている。

3) 井上忠「黄金の記憶」『刻み4』pp. 10-13。なお、本論文では、引用の際、旧かな・旧字体は新かな・新字体に改め、必要に応じルビをふる。

4) 井上忠「『ガキ大将』の告白」『刻み4』p. 52。

5) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」(田中小実昌との対談)『仏教』1988年10月号、p. 14。

6) 井上忠「『ガキ大将』の告白」『刻み4』p. 52。

7) 「対談 体験が言葉が変わるとき」(八木誠一との対談)『理想』1985年11月号、p. 27。

8) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」p. 14。

9) 井上忠「二冊の『本』」『刻み4』p. 21。

問した。お定まりの『神経質な子だ』という台詞でおしまいだった¹⁰⁾。

この台詞を言ったのは井上の父親のようである。子守りをしてくれた隣家のN夫婦と違い、井上の父親は宗教的な人間ではなかった。

「たまりかねて父に訴えますと、いつも優しいひとなのに、『神経質な子だねえ』と言っただけだった〔…〕。開明家の父は坊主臭い『宗教』が真っ向から嫌いだったらしく、若くして歿した父の先妻の墓は、戒名など一切なく、俗名のままで今日でも中国山脈の奥懐に立って〔いる。〕¹¹⁾」

また、小学校の校長をしていた伯父も宗教的な人間ではなかったようだ。仏教に興味をもった井上が勉強部屋に写経を貼り廻らしていたのを見て、「若いのにこんなことをしているんじゃないぞ」と井上の父親に向かって言ったそうである¹²⁾。

2 一高入学

12歳になった井上は、1938年（昭和13年）4月に旧制の広島県立呉第一中学校に入学する¹³⁾。呉一中は現在の広島県立呉三津田高等学校の前身である。同学年に作家の田中小実昌¹⁴⁾がいる。田中は、「井上忠さんとは旧制中学で同学年だが雲の上みたいな大秀才だった¹⁵⁾。」「中学のときからそうだったが、とにかく勉強をする男だった¹⁶⁾」と書いている。

井上は1943年（昭和18年）3月に呉一中を卒業し、4月に一高すなわち旧制の第一高等学校（現在の東京大学教養学部）に入学した。17歳になったばかりだった。『第一高等学校一覧（自昭和十八年至昭和十九年）¹⁷⁾』に掲載¹⁸⁾されている「生徒名簿（昭和十八年四月現在）」を見ると、「文科第一学年四之組」に「呉一中 井上忠 広島」と記されている。一緒に入学した1年生は文科200名、理科280名の計480名だった。この名簿から生徒たち全員の出身中学を知ることができるが、呉一中出身の1年生は井上も含め2名だけである。2年生に1名いるが、3年生には見当たらない。呉一中での井上の秀才ぶりが想像できる。

井上の入った「文科四組」は第一外国語がドイツ語だった¹⁹⁾。1年生のときのエピソードを井上は書

10) 井上忠「優しき死」『刻み4』pp. 13-14.

11) 井上忠「二冊の『本』」『刻み4』p. 21.

12) 井上忠「『ガキ大将』の告白」『刻み4』p. 52.

13) 井上と同学年の田中小実昌が1938年（昭和13年）4月に呉一中を受験していること（「田中小実昌年譜」『ユリイカ』2000年6月臨時増刊号、p. 230）から推測した。

14) 田中小実昌（1925～2000年）。

15) 『仏教』1988年10月号、p. 205の「井上忠『哲学の刻み』法蔵館」の広告文。『超言語』『究極』巻末にも掲載。

16) 田中小実昌『バスにのって』1999年の「あとがき」。『ユリイカ』2000年6月臨時増刊号、pp. 148-150に再録。）

17) 1944年（昭和19年）3月発行。

18) pp. 87-115に掲載されている。

19) 1943年（昭和18年）4月8日発行の『官報 第4869号』に一高の入学者名簿が掲載されている。それによると、井上が入学したのは「文科五類」である。前年の1942年（昭和17年）まで、入学後に履修する第一外国語によって、文科系は甲類（英語）・乙類（ドイツ語）・丙類（フランス語）の3つに分かれていた。しかし、この年は、一類（英語および古典歴史を選修すべき者）、二類（英語およびフランス語）、三類（英語およびドイツ語）、四類（ドイツ語および古典歴史）、五類（ドイツ語および英語）、六類（フランス語および英語）の6つに分けられた。井上のクラス「文科四組」は全員が文科五類に属していた。

いている。

「ドイツ語の習いたてのころで、カントの『プロレゴメナ²⁰⁾』を十日間ほど徹夜して読み上げたら、文字通り読みはしたけれど、なにが書いてあったのか、頭には一つも残らず、たまたまその徹夜あけに友人たちと国会見学にでかけて、首相演説の間中大いびきで眠り通し、守衛たちが掴み出そうとの見幕で近寄りかけるので、友人一同小生を庇いながら大往生したらしい。首相の名は東條英機であった²¹⁾。」

井上にとって一高生時代はどのようなものだったか。井上は呉一中に在学していた時期を「罪なき楽園にも似た中学時代」と呼び、「私の歴史は高等学校の門と共に一線を画して始まった」（傍点は井上自身が付けている）と書いている²²⁾。井上²³⁾によると、「一切の既成の言葉を棄てて、自分の眼で見、自分の手で触れたことのみを認める歩み、そしてただ真実のみを求め、これのみに従う歩み」が一高入学と共に始まった。「一高生活の最も性格的な一面は、各人が完全に自己自身であること」にあり、それは「残酷性」と言えるほどだった。というのは、「茲^{ここ}には強者への同感はあるが、弱者への同情は存しない」からだった。「異様に爽やかな空気の中で、[…]^{わたし}驚の孤独と意欲とを学んだ」のである。

また、井上は言う。「ここ〔一高〕へ入るまでは、一生懸命駒場〔一高〕へ入りたいと思ったが、入ったときには、自分がどんなにむなしものかいやというほどたたきつけられて、それからすべてははじまってきた²⁴⁾」。そして、「一年生と二年生とは月とスッポン、ゼロと百の差があった²⁵⁾」。これはどういうことか。

一高は全寮制である。東京に実家がある学生も含め、全員が卒業まで寮に住むことになっていた。一部屋に10人程度が居住した。新入生は、入学式の後、先輩の寮委員から個人面接を受けたが、先輩たちには、新入生の「うぬぼれと幼稚な価値観を叩き潰〔す〕²⁶⁾」という意図があったようである。

当時の日本は、1937年（昭和12年）以降、中国と戦争をし、さらに1941年（昭和16年）以降はアメリカとも戦争をしていたので、新入生たちは一高に入るまで軍国主義的な教育を受けてきた。これに対し、一高の雰囲気は軍部に対し批判的だった。「一切の既成の言葉を棄てて」、「真実のみを求め、これのみに従う」なら、軍部の無謀な行動に対して批判的になるのは当然だったかもしれない。しかし、軍部批判を自由に発言できる場所は当時の日本では極めて限られていた。だから、新入生たちは、面接の際、寮委員の先輩から軍部批判的な質問をされ、驚いている。たとえば、井上と同じ年に入学した豊口秀哉（理科6組）はこう書いている。

「一人の委員から『君は本当に〔大東亜〕共栄圏の確立は達成されると思うか、その際軍人勅諭とか

20) カント (Immanuel Kant) はドイツの哲学者 (1724～1804年) で、『プロレゴメナ』はカントの主著『純粋理性批判』の内容を分かりやすくまとめた著書である。

21) 井上忠『『ガキ大将』の告白』『刻み4』p. 53。なお、東條英機が首相だったのは1941年（昭和16年）10月から1944年（昭和19年）7月までである。

22) 井上忠「武蔵野雑感」『刻み4』p. 183。

23) 井上忠「武蔵野雑感」『刻み4』p. 183。

24) 「座談会 駒場の学生たち」『大学の散歩道』東京大学出版会、1966年、p. 265。なお、一高が東京都目黒区駒場にあったことから、「駒場」は一高（およびその後身である東京大学教養学部）を指す。

25) 「座談会 駒場の学生たち」p. 278。

26) 一高同窓会『向陵誌 駒場篇』（こうりょうし・こまばへん）向陵誌刊行委員会、1984年、p. 1609。

戦陣訓のようなものは役立つと思うか』と突然聞かれ、驚いて軍人としての心構えと身の処し方を述べているので役立つと思うと答えた様に思う。すかさず『その様に占領地での統治が行われていると思うか、君は人から教えられた知識はすべて本物と思うか。もっと事の本質を見ろ』と軍部批判とも取れる話であり、そこまで返事も踏み込まずしどろもどろであった。更にハリウッドの映画や芥川〔龍之介〕の小説にふれた質問をされたので『映画はニュースしか見た事ないし小説は読んだ事ないので分らない』と答えたら、更に大声で『君は余程の田舎者だ、そんな知識と考^{しま}えで一高の寮生活は出来ないぞ』とどやされた。〔…〕とんでもない学校に入学して^{しま}ったと暗澹とした気分であった²⁷⁾。』

新入生の中には、面接の際に泣き出す者もいた。たとえば、石田春夫（文科1組）は言う²⁸⁾。「入学時の寮委員の面接で、天皇批判を激しく迫られた私は、答えに窮したあげく、不覚にも泣き出してしまうという醜態を演じたのである。」そして、石田は「弱い自分をなんとか鍛えて強い精神をもちたい」と考え、坐禅をするサークル「^{りょうぜんかい}陵禅会」に入部したと言う。

入学後も「ストーム」といって、就寝中に先輩たちが部屋に乱入し、新入生たちを叩き起こして、怒鳴ったり寮歌を高唱したり、演説や説教をしたりするという習慣があった²⁹⁾。

17歳の井上も、初めて親元を離れ、全国から集まった学生たちとの、この濃密な共同生活に入った。それまでの自分が「どんなにむなしなものかいやというほどたたきつけられ」ような経験をしたのであろう。広島県の「大秀才」だった井上が、一高の学生たちの中で揉まれ、精神的自立そして知的自立への第一歩を踏み出したのである。

3 自己の問題と絶望

井上は新しい環境の中で貪欲に学んでいった。だが、やがて、大きな問題とぶつかった。

「ショーペンハウエル³⁰⁾ からニーチェ³¹⁾ へ、私ははじめて知る思想の洞窟を息づまる程の歓喜に満ちて進んだ。だがこの自分自身でものを見る歩みは、結局自己自身の問題に集中する³²⁾。」

それは「自分とは何か？」という問題だった。

「本を読もうとしても、なにか論じようと思っても、自分が何か分かってもないのに、どうしてそんな呑気に『解説』をわがもの顔にできるのか、自分になんの権威があって、何がどうのと言葉を語り紡ぐことができるというのか³³⁾。」「自分が書く根拠を知らないで書く。言う根拠もなしに言うことは恥ずかしい³⁴⁾」。

井上は呉一中の同窓生である田中小実昌との対談でこう言う。

27) 一高一八会（いちはちかい）編『風荒ぶ曠野の中に』（かぜすさぶこうやのなかに）1995年、pp. 584-585.

28) 一高一八会編『風荒ぶ曠野の中に』pp. 28-29.

29) 一高同窓会『向陵誌 駒場篇』p. 1632.

30) Arthur Schopenhauer (1788～1860年、ドイツの哲学者)。

31) Friedrich Wilhelm Nietzsche (1844～1900年、ドイツの哲学者)。

32) 井上忠「武蔵野雑感」『刻み4』p. 183.

33) 井上忠「二冊の『本』」『刻み4』p. 22.

34) 「対談 体験が言葉に変わるとき」p. 28.

「高等学校〔一高〕へ入ったあたりから〔死の恐怖と並んで〕もうひとつ問題が起こった。なんで人は平気で判断めいたことを言うのだろうかということ。何もわかってないのに、何か言うじゃない。〔…〕それは非常に恥ずかしいと思った³⁵⁾。」

私たちは普段「私はこう思う」とか「私の考えによれば」と言う。「それは正しいと思う」とか「間違っていると思う」と言う。しかし、そう言っている「私」が何であるか分かっているのか。自分が何であるか分かっていないくせに、「私はこう思う」となぜ平気で言えるのか。なぜ自分の口からつるつると言葉を紡ぎ出していけるのか。一高生の井上はこのように問うているのである。この疑問を突き詰めると、何も言えず何もできない状態になる。

井上は当時の状況を、シェストフ³⁶⁾の言葉を使って、「現実を受け容れることは不可能であり、しかも同時にそれを受け容れないことも不可能である。……もはや壁に頭を打ちつけることしか残っていない」と描写したり、禅仏教の書物『無門関』³⁷⁾の言葉を引用して、「この熱鉄丸を吞了するが如くに相似て、吐けども又吐き出さず」と描写したりしている³⁷⁾。

このような状態だった井上は2年生（18歳）のときにキルケゴール³⁸⁾の存在を知った。しかし、当時は戦争中のために本が出回っておらず、友人から岩波文庫の『死に至る病』（キルケゴール著）を借りて、大学ノートに一字一字写していった³⁹⁾。井上は田中小実昌に向かってこう言う。

「そのときはじめて、ぼくが非常に困っている問題というのは、やっぱり問題としてあるんだということがわかった。つまりそういうことを問題としてというよりも、そういうどうにもならない状態になる人がいるもんだということがわかってきた⁴⁰⁾。」

キルケゴールの言う「死に至る病」とは、「絶望」すなわち「自己がそれ自身でない」（自己喪失）ということである。キルケゴールはこの本の中で、絶望のさまざまな形態を分類している。たとえば、「意識という規定のもとに見られた絶望」は3種類に分類される。すなわち、「自分が自己を持っていることを意識していない状態（無知）」、「自己を持っていることを意識しているが、自己自身であろうと欲しない状態（弱さの絶望）」、「自己を持っていることを意識しており、かつ、自己自身であろうと欲する状態（強情）」の3種類である。これらは「自己を喪失」している点では共通である。井上はこの本の中に自分自身が陥っている状態の描写を見いだしたのである。

ところで、この時期、一高は異常な状態にあった。原因は戦争である。国外へ多くの兵士を送り出したために生じた国内の労働力不足の対策として、「学徒動員」が始まった。中学高校大学の学生・生徒

35) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」p. 14.

36) Lev Shestov (1866～1938年、ロシア出身の哲学者)。

37) 井上忠「二冊の『本』』『刻み4』p. 22.

38) Søren Aabye Kierkegaard (1813～1855年、デンマークの哲学者)。

39) 井上忠「二冊の『本』』『刻み4』p. 23. この友人は「同学年でも年長のI君」であり、3年後には哲学科の出隆教授との面会を手引きしてくれた（井上忠「一冊の本』』『刻み4』pp. 4-6）。おそらく4歳年上の今道友信（1922～2012年、東京大学名誉教授、美学専攻）であろう。この点については、後述の第2節「法学部から文学部へ」第1項「一高を卒業して法学部へ」を参照せよ。

40) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」p. 15.

が授業を休んで工場や農場で勤労奉仕をおこなうのである⁴¹⁾。井上が2年生になった1944年(昭和19年)の4月から一高の2年生は茨城県日立市^{ひたち}に行き、宿舎に住み込み、工場や畑で働いた。9月からは一高の寮に戻り、神奈川県などの工場へ毎日通勤した。授業は出勤前の1時間だけだった⁴²⁾。これ以降1945年(昭和20年)3月の卒業まで、まともな授業はおこなわれなかった。つまり、井上たちの学年の場合、普通に授業を受けたのは入学後の1年間だけだった。

さらに、戦争は、「学徒出陣」そして「戦死」という形で一高生たちに影響を与えていた。1943年(昭和18年)9月に文科系学生の徴兵猶予が停止され、一高の文科系学生のおよそ2割にあたる119名が学徒出陣し軍隊へ去った⁴³⁾。また、1944年(昭和19年)7月7日には一高内で「戦没先輩四十数名の慰霊祭」がおこなわれた⁴⁴⁾。学生たちは皆「いずれは自分も軍隊に行くのだ」と意識せざるを得なかった。

2年生になった井上は、他の学生たちが行った茨城県ではなく東京都内の陸軍軍医学校(東京都新宿区)に学徒動員された。一高の文系10人理系10人の学生が選ばれ、同盟国のドイツから潜水艦で運ばれてきた外国語の文書を翻訳する作業に従事した。田中小実昌との対談でこう語っている。

「ぼくは学徒動員先が軍医学校で、ちょうどペニシリンなんかの開発をやっていた⁴⁵⁾。ドイツからUボート〔潜水艦〕で運んでくるのを、こちらはI号潜水艦を出して、インド洋で受け取った青写真をこっちへ届けるわけです。そいつを持ってきて、片っ端から翻訳をやっていた。その青写真はピントがずれててもものすごい。すっかり目を悪くして、目が見えなくなっちゃった。それと、キルケゴールを写すのがほとんど並行していた⁴⁶⁾。」

井上がキルケゴール的絶望の中にはまり込み何もできなくなっていたのは、ちょうどこのころ1944年(昭和19年)の8月から9月にかけてである。田中小実昌に向かって言う。

「とにかくどういう話を聞いても、それは嘘であるということだけははっきりして、そして自分はどうしようもない。[...]ほんとに、二カ月近く何もできないわけ。本は読めないし、寝るわけにもいか

41) 文部科学省白書『学制百年史』第1編第4章「戦時下の教育」第1節第3項「戦時教育体制の進行」。

42) 一高一八会編『風荒ぶ曠野の中に』に数多くの体験談が書かれている。なお、1944年(昭和19年)の一高に夏休みはなかった(一高同窓会『向陵誌 駒場篇』p. 345)。

43) 一高同窓会『向陵誌 駒場篇』p. 196。

44) 一高同窓会『向陵誌 駒場篇』pp. 224-225。ただし、この40数名の戦没者は前年の一高からの学徒出陣119名にすべて含まれるわけではない。一高を卒業し東京大学などに進学した後に学徒出陣して戦死した者が多いと考えられる。東京大学学生の戦没者数は1943年(昭和18年)が75名、1944年(昭和19年)が298名、1945年(昭和20年)が544名である(東京大学史料室『東京大学の学徒動員・学徒出陣』東京大学出版会、1998年、p. 136)。

45) 軍医学校でのペニシリン開発については、角田房子『碧素・日本ペニシリン物語』新潮社、1978年にくわしく記されている。同書pp. 51, 65によると、4月18日に勤労動員が始まったが、軍医学校側の受け入れ態勢が整うまで、軍から講師が一高に派遣され、基礎知識の講義が行われた。そして、6月6日以降、学生たちは軍医学校で働くようになった。一高で同学年の今道友信(1922～2012年、東京大学名誉教授、美学)もこの20人に含まれている(今道友信『知の光を求めて』中央公論新社、2000年、pp. 27-30)。さらに、9月から、文系5名、理系5名が補充されたが、この中に、本論文第Ⅱ節「法学部から文学部へ」第1項「一高を卒業して法学部へ」で後述する星野英一(1926～2012年、東京大学名誉教授、民法学)が含まれている。

46) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」p. 15。ただし、角田房子『碧素・日本ペニシリン物語』pp. 11-14によると、ペニシリンのことが記載された医学雑誌は、ドイツの潜水艦ではなく、日本の潜水艦(伊号第八潜水艦)によってドイツから運ばれ、途中のシンガポールから飛行機で帰国した人が日本に持ち帰ったらしい。また、同書p. 47によると、井上たちが翻訳した文書には、この他に外務省から借り出した多数の医学文献も含まれていたようである。

ないでしょう。寝るなんて呑気なことではできない。最後には息してもいけないんじゃないかと思ったけど、息はしている。眠っちゃいけないと思ってても眠ってはいる。しかし意識のなかでは全然そういうことはしない。どうにもならない。どうにもならないというだけで、とにかく守るのは、このどうにもならないところで立ち止まっていることだけ。そうするよりしようがない。だって、何かすれば嘘になるから⁴⁷⁾。」

18歳の井上は何も言えず何もできない状態にはまり込んでしまった。

4 神秘体験

このような状態が1カ月以上続いたあと、不思議な体験をする。

「それは昭和十九年九月十七日夕方。〔…〕昔の一高、今の〔東京大学〕教養学部の第一研究室と言ってる建物ですが、寮が四つあって、そのいちばん南側の寮です。その屋上に出て茫然としていたんです。もう天も地もない、もう俺はどうしようもないと、とにかくどうしたらいいのかわからない。本当に凝縮した一点みたいになっていたんですね。〔…〕突然、裂けたように天が明るくなりまして、非常に大きな人のような形の姿が頭の上から迫ってきたわけです。そしてその時に、『汝の罪赦されたり』という声がしたのです。不思議なことにその声は上からは聞こえない。足もとからでした。その時の足もとから聞こえた声は、もう予想もしない声でした。そしてどうにも抵抗しようのない声でした⁴⁸⁾。」

また、同じ体験を次のようにも描いている。

「意識してはもはや眠るどころか、肉体をもって呼吸することすらできないと思われる一ヶ月余〔…〕。四周の世界は影絵みたいに薄墨^{うすず}み、わたし自身も影法師になったようでした。そしてその夕方影法師さながらのわたしは南寮^{なんりょう}〔…〕の屋上で、通気塔によりかかりながら佇んでいました。薄墨の世界が一気に裂けました。天地は眩^{まぼゆ}い紫の光に明るく満ち溢れ、人の形に近い巨大な輝く姿が頭上に迫ってきました。その時です、まったく予期しなかった声が、わたしの脚下から轟きました。『汝の罪赦されたり』⁴⁹⁾。」

この神秘体験によって、1カ月以上続いたキルケゴール的絶望は一挙に粉碎された。

「それは〔…〕絶望を、抵抗するすべもなく一挙に粉碎し、わたしを明るい無条件の自由と歓喜へと解放し去り、もはや一抹の疑惑の余地も残しませんでした⁵⁰⁾。」

井上のことを「雲の上の大秀才」と評する田中小実昌は言う。

「秀才は、ほかのものならなんでもなれるかもしれないけど、すぐれた哲学者にはなれまい。秀才は秀才のままで、チュウ〔忠〕さんにはいっぺん死んだような大きな転換があったのではないか。哲学は秀才が頭のなかでガチガチ解いていくものではない。……とくにチュウさんの哲学はニンゲンの欲にからまないもの。いろんな欲をきりすてて、ただ哲学をみつめていくのは、なみたいのことでない⁵¹⁾。」

47) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」p. 15.

48) 「対談 体験が言葉に変わるとき」p. 25.

49) 井上忠「二冊の「本」『刻み4』」p. 23.

50) 井上忠「二冊の「本」『刻み4』」pp. 23-24.

51) 『仏教』1988年10月号、p. 205の「井上忠『哲学の刻み』法蔵館」の広告文。『超言語』『究極』巻末にも掲載。

18歳のときの絶望と神秘体験が、田中の言う「いっぺん死んだような大きな転換」にあたるのではないだろうか。

それにしても、この神秘体験において井上は何に会ったのか。井上はそれをさまざまな仕方で呼んでいる。たとえば、「神」と呼ぶときもある。聖書学者の八木誠一⁵²⁾との対談において言う。

「厳密に何日とは言えませんが、だいたい聖書にある通り、四十日四十夜の後、僕は本当に神に出会ったんです⁵³⁾。」

八木から「それは神様なんですか、出てきたのは。」ときかれた井上は「その時はそうだと思います」と答えている⁵⁴⁾。

その「神」はキリスト教の神であった。その点に関して、「浄土真宗の雰囲気しか知らない」のに「十八歳のときの体験でとにかく出てきたものは、釈迦でも阿弥陀様でもなくてキリストだった。それが不思議なんです」と井上は言う⁵⁵⁾。しかし、浄土真宗の雰囲気しか知らなかったのは一高に入るまでであり、一高入学後はニーチェやキルケゴールを読んだのだから、キリスト教的な発想にいつの間にか馴染んでいたであろう。とりわけ、この神秘体験の直前に読んでいたキルケゴールの『死に至る病』では、「絶望」を「自己喪失」と定義し、「自己の課題は自己自身となるにある、——これは神への関係を通じてのみ実現せられうるのである⁵⁶⁾」とはっきり書かれているから、キルケゴールへの共感が知らず知らずのうちにキリスト教へ井上を近づけていたのではないだろうか⁵⁷⁾。

他方で、井上は「神」以外の呼び方もしている。論文「愛智の道無さをめぐる一考察⁵⁸⁾」（執筆時30歳）では「存在」「大いなるもの」と呼んでいるし、「パルメニデスの歌⁵⁹⁾」（執筆時31歳）、「存在の歌⁶⁰⁾」（執筆時32歳）、「プラトンへの挑戦⁶¹⁾」（執筆時33歳）では「存在」「それ」「あれ」「なにか」と呼んでいる。

さらに「根拠」という呼び方が論文「出で遭いへの訓練⁶²⁾」（執筆時37歳）において初めて現れる。そして、論文「アイデア⁶³⁾」（執筆時39歳）において井上は言う。

「かくも密着し圧倒し来る根拠の迫りに対して、ひとは、絶望をもって抵抗しつづけることはできない。〔…〕絶望は、一切の事実よりおのれを異ならしめ、ただ永遠に一貫して自己自身であろうとする凝縮の一点である。〔…〕この緊張の頂点にあって、突如として、事実の仮底は破れ、自我の唯一性を、その指標となしつづけた根拠は、その全体を電撃と化して、絶望を打ち砕き、われを圧倒し、急襲するの

52) 八木誠一（1932年～、東京工業大学名誉教授、聖書学）。

53) 「対談 体験が言葉に変わるとき」p. 23.

54) 「対談 体験が言葉に変わるとき」p. 28.

55) 「対談 宗教—その『根拠』を問う」p. 16.

56) キルケゴール『死に至る病』斎藤信治訳、岩波文庫、2014年、p. 55.

57) 尤も、井上は「キルケゴールの『絶望』は自分の言葉として了解できても、それを『罪』とする点には、いつも違和感が」と言っているが（井上忠「二冊の「本」『刻み4』p. 24）。

58) 『理想』1957年3月号、pp. 64-79.

59) 『挑戦』pp. 39-73.

60) 『挑戦』pp. 74-109.

61) 『挑戦』pp. 3-36.

62) 『挑戦』pp. 131-166.

63) 『挑戦』pp. 204-222.

である⁶⁴⁾。」

これは18歳のときの神秘体験の描写である⁶⁵⁾。キルケゴール的絶望が根拠の急襲によって打ち碎かれたと言うのである。また、「根拠」の他に、「あいつ⁶⁶⁾」「そいつ」「やつ」「完全犯罪者⁶⁷⁾」という呼び方も現れている。いずれにしても、この神秘体験によって井上は絶望から歓喜へと急転回した。田中小実昌に向かって言う。

「今度は逆に、大変嬉しくなっちゃって、何カ月か、全然ものが手につかなくなった。死が怖いというのと、ものが読めないということが、理屈で解決したわけじゃない。理屈はないけど、そこへすごい何かが出てきちゃったものだから、ぼく自身は嬉しくて嬉しくてしようがなくなっちゃった⁶⁸⁾。」

幼児のとき以来の「死の恐怖」と一高入学後の「自己の問題」とがこの神秘体験によって一挙に解決したと言うのである。

そして、「その夜から自分でクリスチャンになった⁶⁹⁾」井上は、翌日の9月18日、東京都千代田区神田の古書店に行き、ヘブライ語とギリシア語の『聖書』を購入する⁷⁰⁾。さらに、呉一中の地理の教師である仁木盛雄がクリスチャンだったことを思い出し、冬休みに呉に帰省した際⁷¹⁾、プロテスタント（メソジスト派）の教会を紹介してもらって洗礼を受けた。「ちょっと勉強したらすぐ洗礼を受けさせてくれた」そうである⁷²⁾。また、「基督教青年会〔YMCA〕の中国地方研修会なんていうのに生徒を引き連れて参加して、パスカルの話なんぞしたのを憶えている⁷³⁾」と言う。

18歳のときの絶望と神秘体験が井上の生涯にとって大きな意味を持つのは確かである。71歳の井上は当時を振り返り、「その体験は筆者の生涯を貫いて、あらゆる思索の原点となった⁷⁴⁾」と言う。しかし、井上は、この神秘体験がそのまま哲学になるとは考えていない。

「存在体験は直ちに真理の開示ではない。〔…〕それは〔…〕瞬時に消え去るものなのである⁷⁵⁾。」「体験は所詮個人の体験である。それに満足すれば下手な新興宗教の教祖にでもなっておのれの体験を他人にまで無雑作に押し付けるか、自分の『神秘』体験がすべてであるかのごとき錯覚に陥って自閉するか

64) 井上忠「イデアイ」『挑戦』pp. 208-209.

65) 井上忠「二冊の「本」」『刻み4』p. 22.

66) 33歳のときに執筆した「プラトンへの挑戦」『挑戦』p. 19.

67) 3つとも、53歳のときに執筆した「根拠」（井上忠編『哲学』弘文堂、1979年）pp. 273-274に登場する。ただし、「プラトンへの挑戦」（執筆時33歳）『挑戦』p. 8において既に「哲学とはこのなべてのものに何者か知れぬものによって遂行されつつある完全犯罪へのいわば挑戦であり、応戦と言えよう」と言われている。

68) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」p. 16.

69) 井上忠「全天を覆い来たりしものは何か？」『究極』p. 126.

70) 井上忠「二冊の「本」」『刻み4』p. 24。「2冊の本」というのは、旧約聖書（ヘブライ語）と新約聖書（ギリシア語）のことである。

71) 「対談 体験が言葉に変わるとき」p. 31.

72) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」pp. 16-17. 仁木の「盛雄」という名前は「田中小実昌年譜」『ユリイカ』2000年6月臨時増刊号、p. 230による。

73) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」p. 17. また、八木誠一との対談（「体験が言葉に変わるとき」p. 32）では、この研修会を「西日本キリスト教青年会夏期合宿」と呼んでいる。夏休みに呉に帰省しているときであろうか。

74) 井上忠「全天を覆い来たりしものは何か？」『究極』p. 126.

75) 井上忠「存在の歌」（執筆時32歳）『挑戦』p. 104.

のほかはあるまい。〔…〕無恥無学の懈怠^{けだ}に陥らぬためには学の精進が不可欠である⁷⁶⁾。」

体験に満足しては、決して哲学にならない。自分の神秘体験が自分自身にとっては否定できない絶対的なものであるけれど、他人からは「単なる心理現象」と見なされることを井上はよく承知していたのだろう。そして、他人にも分かる筋の通った議論を通して、あの体験が何を示していたかを自分も知りたい、という望みを生涯持ち続けたのだろう。それゆえ、「筆者の課題は、あの体験をいかに硬質の理論言語に刻み上げるか、となった⁷⁷⁾」と71歳の井上は言うのである⁷⁸⁾。

II 法学部から文学部へ

1 一高を卒業して法学部へ

神秘体験をした翌年の1945年（昭和20年）3月に井上は一高を卒業する⁷⁹⁾。本来の修業年限が3年である旧制高校を2年で卒業しているが、これは戦争中の特例措置⁸⁰⁾だった。ちなみに、1学年下の1944年度（昭和19年度）入学者から修業年限は3年に戻ったから、2年で卒業したのは、旧制高校の歴史の中で井上たちの学年だけである。

一高を卒業した学生の多くは東京大学（当時の名称は「東京帝国大学」）に進学する。井上は東大の法学部政治学科に進学した。しかし、なぜ哲学科に行かなかったのか。

「キルケゴールとの出遭いはわたしにすさまじいまでの自己への開眼を与えてくれたが、だからと言って大学に進んでそれを『研究』する気には全然ならなかった。キルケゴールは『研究』の対象たる『問題』などではなく、わたしの人生そのものに打ち込まれた楔であった⁸¹⁾。」

当時の日本におけるキルケゴール研究について、井上は、「猛烈に腹が立った。よくもこの地獄の問題を論文なんかにできるものだ、それは本当に許しがたいことだと思いました⁸²⁾」と言う。そして、八木誠一に向かってこう言う。

「哲学科へ行ってキルケゴールでも勉強しようかという想いもちらとはありました。しかしこれはいちばんいけないことだ、こういう問題を、文学部へ行って、学問して、批評か論文書くなんて、そんな汚いことがあるかと思った。それで、僕は法学部へ行きました⁸³⁾。」

これに対し、八木から、「キルケゴールについて論文など書きたくないというのはわかるけど、では、どうして他ならぬ法学部だったんですか、たとえば理学部じゃなくて」と尋ねられ、こう答えている。

76) 井上忠「あとがき」（執筆時69歳）『バルメニデス』p. 365.

77) 井上忠「全天を覆い来たりしものは何か？」『究極』p. 126.

78) この体験を硬質の理論言語に刻み上げる最初の試みが27歳のときに書いた論文「アリストテレスの『有』把握」である。この点については本論文第Ⅲ節「哲学科入学から最初の論文まで」第4項「最初の論文の完成」を参照せよ。

79) 「井上忠先生年譜」『追悼集』p. 101.

80) 文部科学省白書『学制百年史』第1編第4章「戦時下の教育」第1節第3項「戦時教育体制の進行」。

81) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 4.

82) 「対談 体験が言葉に変わるとき」pp. 24-25.

83) 「対談 体験が言葉に変わるとき」p. 29.

「心の問題をやるのなら、〔…〕自分の当時の力をもってしてはできる限り、やってみた。だから、あとは〔…〕、何かゴツゴツした世の中がじっさいにどう動き、そのなかで僕の体験は一体どこまで、どういう形で自分の位置を主張し抵抗できるのか。〔…〕法学部へ行って、まずは政治、経済で動く実際の世界というのを見てこようと思ったわけです⁸⁴⁾。」

また、27歳のときには次のように書いている。

「自己の問題に一応の結着を獲て、私は世界の問題へ転じた。〔…〕この現実の世界の全体構造を、何らかの形で理論的把握に齎^{もたら}したいと思った。はじめ西田哲学⁸⁵⁾、特に当時続々出版された最後の論文集あたりを座右の書として、根幹を考えつつ、手当たり次第に雑学を重ねた。〔…〕東大の法学部に入ってから、社会科学的方法を徹底的に進めて見たいと努めた⁸⁶⁾」。

井上自身はこのように述べている。しかし、若いときの進路選択は必ずしも十分な理由に基づいて自覚的におこなわれるとは限らない。井上と同じく1945年(昭和20年)3月に一高を卒業した周囲の友人たちはどうだったか。東大文学部哲学科に進んだ今道友信⁸⁷⁾は、「一高の文科で大部分のまともな生徒は、みな法学部や経済学部を志望していました⁸⁸⁾」と言う。他方で、東大法学科に進んだ星野英一⁸⁹⁾は、「法学というのは、パンのための学問だと当時から何度も聞かされています〔…〕。当時、法学部に入るということに何となく後ろめたさがあったような気がします」と言い、「本当は哲学などがいいな、と思いましたが、哲学は今道君が行くし、あんな人がやるのだったら自分はとてもかなわないと思いました」と言う⁹⁰⁾。

井上・今道・星野たちが在学していた時期に一高で西洋史を教えていた林健太郎⁹¹⁾によれば、旧制高校には、「社会における立身出世」と「人間性追究の内面主義」という互いに「衝突する」二つの要素があった⁹²⁾。確かにそれらの要素が今道や星野の言葉に現れていると言えるだろう。井上の場合も、この二つの要素の間で迷いつつ、「とにかく自由になんでも勉強してやれと法学部の政治学科にはいった⁹³⁾」というのが真相に一番近いのではないだろうか。

84) 「対談 体験が言葉が変わるとき」p. 30.

85) 西田幾多郎(1870～1945年、京都大学名誉教授)の哲学。

86) 井上忠「武蔵野雑感」『刻み4』p. 185.

87) 今道友信(1922～2012年、東京大学名誉教授、美学)。

88) 今道友信『知の光を求めて』p. 30.

89) 星野英一(1926～2012年、東京大学名誉教授、民法学)。

90) 星野英一『ときの流れを超えて』有斐閣、2006年、p. 33。前述の『第一高等学校一覽(自昭和十八年至昭和十九年)』掲載の「生徒名簿(昭和十八年四月現在)」によると、星野は井上と同じクラス(文科4組)である。また、井上や今道が参加していた陸軍軍医学校での勤労働員にも1944年(昭和19年)9月から参加している(星野『ときの流れを超えて』p. 25)。なお、井上や星野より4歳年上の今道は当時既にギリシア語やラテン語で書かれた本を読んでいた。

91) 林健太郎(1913～2004年、東京大学名誉教授、西洋史学)。

92) 林健太郎『昭和史と私』文藝春秋、1992年、pp. 64-65。なお、林自身も一高の出身(昭和4年入学、7年卒業)である。

93) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 4.

2 原爆体験

井上は1945年（昭和20年）4月に法学部に入学し、まず、「刑法」と「憲法」の授業を受けた。しかし、その授業内容に失望した井上は、すぐに休学し、買えるかぎりの岩波文庫を抱えて広島県呉市に帰省した⁹⁴⁾。もっとも、当時の東京大学では多くの学生が軍隊に入営しており、大学にはわずかの学生しか残っていなかった。例えば、1944年（昭和19年）9月には法学部の学生2203人中1500人が休学し、そのうち1438人が軍隊にいた。終戦直後の1945年（昭和20年）9月だと2931人中2374人が休学していた。つまり、この時期、7割から8割の学生は大学にいなかった⁹⁵⁾。しかも、1945年度（昭和20年度）の場合、法学部では4月だけ授業が開かれ、5月からは勤労動員だった⁹⁶⁾。文学部でも、4、5月だけ授業で、6月の第2週から勤労動員だった⁹⁷⁾。東大で授業が再開されたのは、戦争が終わった後の9月からである⁹⁸⁾。このように、当時、一高から東大に進んだ学生たちにとって、1944年（昭和19年）4月の学徒動員の開始から1945年（昭和20年）8月の終戦までの1年半の間、まともな授業はほとんどなかった。

法学部を休学していたときの大きな事件として1945年（昭和20年）8月6日の原爆体験がある。井上はそれを次のように描いている。

「前の晩、伯父がもう一日泊まってゆけ、とすすめてくれたのを、読みかけた本⁹⁹⁾もあるから、と振りきって帰宅した。翌朝いつものように、蘇鉄の影を宿す硝子窓の前で、机に向かっていた。突然、音もなく、書物も机も窓も、そしてわたし自身も消失し、四周はただ遮る一物もない、限りなく透明な青紫色の世界に一変した。無限とも思える一瞬が過ぎ、いつもの机や窓が、そして凝然となったわたしが、蘇った。直後、家屋を揺るがし硝子窓を破らんばかりの大音響が襲ってきて、鳴りやもうとしなかった。屋外にとび出したわたしの眼に、灰が峰¹⁰⁰⁾の背後の、にえ耀くような夏空の紺碧に、真っ白いきのこ雲がゆっくりと立ちのぼり、膨んでいくのが映った¹⁰¹⁾。」

このとき、井上は、「あの一瞬で一挙にそれまでであった事実の世界が簡単に消し飛んだ。なんと事実というものは根の浅いものだな」と思った。ただ、前年9月の一高の寮の屋上での神秘体験の方が自分にとって重大だったので、原爆体験が自分の中で生きていると思ったのは、のちにパルメニデス¹⁰²⁾を

94) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 4.

95) 東京大学史料室『東京大学の学徒動員・学徒出陣』pp. 278, 280, 293, 296. なお、これらの人数には、大学院生の在籍者（1944年度が52名、1945年度が51名）および休学者（1944年度が5名で全員が軍隊、1945年度も5名が休学）を含む。

96) 星野英一『ときの流れを超えて』pp. 38-39.

97) 今道友信『知の光を求めて』p. 39. ただし、星野と今道は「戦時特別受業学生」に選ばれ、勤労動員には行かず、大学で特別に授業を受けている。これは研究上の後継者養成のために東大が政府に要求した制度である（今道友信『知の光を求めて』p. 40、星野英一『ときの流れを超えて』pp. 39, 45）。

98) 星野英一『ときの流れを超えて』p. 49.

99) 「対談 体験が言葉に変わるとき」p. 34によると、この本はカントの『純粹理性批判』である。

100) 呉市と広島市の間にある山。

101) 井上忠「出会い」『刻み4』pp. 18-19.

102) Parmenides（前5世紀前半、ギリシアの哲学者）。

研究するようになってからだと言う¹⁰³⁾。

3 哲学への決意

井上は、終戦の翌年1946年（昭和21年）4月に法学部に復学した。今度は法律にまじめに取り組んだ。

「朝から晩まで法律漬けになっていると、あれほどキルケゴール風人生とは無縁に想えた法律の世界すら、まるで算術の演算をしているごとき気安さを生じてくる。ましてその他の社会科学は、時恰もマルクシズム解禁の風潮とも和して面白くて仕方がなかった。世の中のことがたんに感想の対象ではなく、なんでも『理論的に』説明できてしまう面白さだった¹⁰⁴⁾。」

法学部での勉強はそれなりにおもしろかったようである。もっとも、おもしろくなったのは、8月15日の終戦をはさんで、法学部の授業の内容がいくらか変わったことも原因のようだ。たとえば、前述の星野英一によると、憲法学の宮沢俊義¹⁰⁵⁾の場合、終戦までは、「後から考えると旧憲法に対する抵抗なのでは、憲法そのものの体系的な説明はあまりなくて、漫談ばかりでした。〔…〕試験もそういう問題が出ていたのです。〔…〕授業としては面白くなかった」。ところが、「試験が終戦後に行われたときには大きな問題〔すなわち、憲法に関する〕根本的な問題」が出たそうである¹⁰⁶⁾

しかし、やがて井上には人間への興味が戻ってきた。

「近代経済学もマルクス経済学も、『経済人』や『労働者』『資本家』として人間を前提してはいる。しかしそのことは人間とは何か、自己とは何かへの問いになんら答えようとするものではない。法における『人格』もまた然り¹⁰⁷⁾。」「実存の深淵と、社会科学理論の地平を調和する為には、単なる折衷論乃至関係論では済まされない。探究は根本から新しい何かを要求している¹⁰⁸⁾。」

そして、法律学における「人間そのものを無視して、所有権、占有権から話を始める考え方」の淵源をローマ法に見いだした。さらに、ローマ法よりも前にプラトン¹⁰⁹⁾の『法律（ノモイ）』という書物があることを知った¹¹⁰⁾。井上は決意する。

「法学部の法律で〔…〕ちょうど欠けたところを充足する何かが、本当はギリシアにあった¹¹¹⁾。」「ギリシア〔哲学〕をやろう。勃然としてそう思った。法学部も三年目になった春のことであった。〔…〕リデル・スコット¹¹²⁾の縮小版〔のギリシア語辞典〕を〔…〕買った¹¹³⁾。」

103) 「対談 体験が言葉に変わるとき」p. 35.

104) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 5.

105) 宮沢俊義（1899～1976年、東京大学名誉教授、憲法学）。

106) 星野英一『ときの流れを超えて』p. 48.

107) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 5.

108) 井上忠「武蔵野雑感」『刻み4』p. 185.

109) Platon（前427～前347年、ギリシアの哲学者）。

110) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 5.

111) 「対談 宗教一その『根拠』を問い直す」p. 18.

112) イギリス人古典文献学者のHenry George Liddell（1811～1898年）とRobert Scott（1811～1887年）。

113) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 5.

それは1947年（昭和22年）のことであり、井上は21歳になっていた。思い立ったらすぐに行動するというのが、18歳の神秘体験の翌日すぐに聖書を買って行ったのと同様、井上らしい。

春にギリシア哲学を学ぶ決意をした井上は、秋になると¹¹⁴⁾、文学部哲学科の出隆^{いでたかし}教授（当時55歳）¹¹⁵⁾に面会し、法学部を卒業して文学部へ移りたいという希望を伝えた。すると、出から「大歓迎じゃ、そういう、法学部を卒業して『ノモイ』やるやつはぜひ欲しい」と言われたそうである¹¹⁶⁾。

出との面会を手引きしてくれたのは、一高2年生のときにキルケゴールの『死に至る病』を貸してくれた「同学年でも年長のI君」である¹¹⁷⁾。これは前述の今道友信であろう。今道は井上より4歳年上だが、成城高等学校を中途退学し、浪人したあと、井上と同じく1943年（昭和18年）に一高に入学した¹¹⁸⁾。そして、一高を卒業するとすぐに哲学科に入学し、出隆が今道の指導教授になった¹¹⁹⁾。

このようにして、井上は文学部へ移ることを決めたのだが、まだ迷いがあった。

「法学部と一緒に出る友人たちが次々社会に羽撃く^{はばた}のを見れば、渾沌の時流にあってただおのが知性の触角のみを導きに、反時代の坑道を掘ろうとするところは重かった¹²⁰⁾。」「このまま卒業して世に出ようか、それとも、と想いは乱れた。しかしやはりこのままでは死んでも死にきれない^{ちまた}。巷の重圧はどうあろうと、わたしはわたしの途を披いてゆくより仕方がない¹²¹⁾。」

そのとき、「去らず懐かし哲学を思う」という言葉が思わず口から出た。この言葉が「わたしの一生の決定を告げていた」と井上は言う¹²²⁾。

Ⅲ 哲学科入学から最初の論文まで

1 アリストテレス『形而上学』との出会い

1948年（昭和23年）4月に22歳で哲学科に入学すると、すぐに予定どおりプラトンの『法律』^{ノモイ}を読んだ。「とくにローマ法体系に欠落し、プラトンでは全法律体系の『序曲』とされた、法の根拠としての人間理解、しかも結局は万物の尺度は人よりもはるかにまして神なり、との立場からする第十卷神

114) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 6.

115) 出隆（1892～1980年、東京大学教授、古代ギリシア哲学）。

116) 「対談 体験が言葉が変わるとき」p. 31.

117) 井上忠「一冊の本」『刻み4』pp. 4, 6.

118) 今道友信『知の光を求めて』pp. 16-17. また、前述の一高の「生徒名簿（昭和十八年四月現在）」の「文科第一学年二之組」に「城東中 今道友信 東京」そして「文科第一学年四之組」に「呉一中 井上忠 広島」とある。

119) 今道友信『知の光を求めて』p. 63.

120) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 6.

121) 井上忠「去らず懐かし哲学を思う」『東京大学教養学部報』第311号、1986年2月14日。これは60歳で東京大学を定年退職する際の文章である。

122) 井上忠「去らず懐かし哲学を思う」。なお、神崎繁（かんざき・しげる、1952～2016年、専修大学教授、古代ギリシア哲学）は、東京大学法学部政治学科にいたことが、井上の「屈折したエリーティズムの背景」だと言う（神崎繁「井上哲学シンポジウムの司会にあたって」哲学会編『根拠・言語・存在』有斐閣、2016年、p. 3）。

学篇を堪能した¹²³⁾。」関連してアリストテレス¹²⁴⁾の『ニコマコス倫理学』を読んだ。

しかし、そのあと巨大な壁にぶつかった。

「たんに、哲学を学ぶ次なる一歩ぐらいのつもりで踏み込んだ〔アリストテレスの〕『形而上学』はまったく勝手が違った。アリストテレスの『第一の哲学』は頑としてわたしのひ弱な好奇心をはねつけ、峻拒した。『形而上学』が『存在』の論であると言う、その『存在』の捉えようがなかった¹²⁵⁾。」

井上は言う。

「当時はプラトンやアリストテレスを読んでも、まだ法学部的頭がとれない。法学部の学問の上にプラス何かをつければ僕の求めるものが出る、と考えた。だからどうしても素直に読めない。で、アウグスティヌス¹²⁶⁾の『三位一体論』読んだ時に、これはとにかく法学部の学問を引きずっていたのでは手も足も出ない¹²⁷⁾。」「社会科学的なものの考え方を、自分の身体から洗い落とすのにずいぶん骨が折れた¹²⁸⁾」。

ふたたびアリストテレスの『形而上学』に向かった。「まるで分からない。自分の考えなど振り棄て、とにかくギリシア語の地面を這い進んだ。やっと臍に、異形の地平が浮かび上がってきた¹²⁹⁾。」それは、1949年（昭和24年）、哲学科2年目（23歳）の冬だった。

そのころから、井上は出隆の自宅（東京都杉並区阿佐谷^{すぎなみ あさがや}）でのアリストテレス『形而上学』の講読会に参加するようになった。この講読会は、今道友信が哲学科に入学した1945年（昭和20年）に出隆が始めたものであり、最初の参加者は、助手の寺沢恒信^{てらさわつねのぶ}¹³⁰⁾、副手の斎藤忍随^{さいとうにんずい}¹³¹⁾、院生の末木剛博^{すえき たけひろ}¹³²⁾、そして学部生の今道の4人だった¹³³⁾。なんらかの事情で中断したあと、1949年（昭和24年）の冬に復活した。

哲学科2年生の井上が初めて参加したのは講読会が復活した最初の夜だった。

「木枯らしが吹いていた。〔…〕昭和二十四年のことで、大通りにも店舗の電飾はまだ全然なかった。〔…〕

123) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 6.

124) Aristoteles (前384～前322年、ギリシアの哲学者)。

125) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 6.

126) Aurelius Augustinus (354～430年、初期キリスト教会の教父)。

127) 「対談 体験が言葉に変わるとき」p. 31.

128) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」p. 19.

129) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 7.

130) 寺沢恒信 (1919～1998年、東京都立大学名誉教授、ドイツ哲学)。

131) 斎藤忍随 (1917～1986年、東京大学名誉教授、古代ギリシア哲学)。

132) 末木剛博 (1921～2007年、東京大学名誉教授、論理学)。

133) 今道友信『知の光を求めて』p. 68. ただし、出隆の自宅での講読会は、出がヨーロッパ留学から帰国した翌年の1928年（昭和3年）から毎週開かれていた（『出隆自伝』出隆著作集7、勁草書房、1963年、pp. 376-378）。テキストは、ヘーゲル『精神現象学』、アリストテレス『自然学』、プラトン『法律』、プロチノス『エネアデス』、『新約聖書』などだった（出かづ子編『回想出隆』回想出隆刊行会、1982年、pp. 10, 84, 119, 130, 135-136）。ちなみに『出隆自伝』のp. 68の次のページに「1936年、ヘーゲル・プロチノスの或る夜」という写真が掲載されている。なお、出隆の自宅は1945年（昭和20年）4月の強制疎開による取り壊し（『出隆自伝（続）』出隆著作集8、勁草書房、1963年、pp. 574-575）までは東京都小石川区小日向台町（こいしかわく・こひなただいまち、現在の文京区小日向台町）にあった。戦後は、阿佐谷の自宅で、金曜日にアリストテレスの講読会が、日曜日にヘーゲルの講読会が開かれていた（『回想出隆』pp. 312-313）。なお、『回想出隆』の存在は納富信留東京大学教授から教えられた。

阿佐谷の出隆先生のお宅で、『形而上学』の講読会が復活した最初の夜のことであった。その夜の議論は忘れようがない。三時間あまりの討論はただ一語 ἐδόξουν [エドクーン、彼らは思った] をめぐってであった¹³⁴⁾。」

この講読会は毎週金曜日の夜7時から開かれ、常時10人程度が参加した¹³⁵⁾。若い井上はこの講読会で鍛えられていった。井上はある夜の講読会における出とのやりとりを次のように報告している。

「先生はすでに長年にわたり幾度も〔『形而上学』の〕翻訳の草稿を重ねておられた。若気のいたりでいろいろ目先を変えた解釈を作り出して持ちこんでも、先生の読みに読みこまれた蓄積は百万キロの重圧となって、結局手も足も出ない実情だった。それでもこれだけは名訳(?)になるぞと気負いこんで披露すると、先生はにやりと破顔^{わら}って、『ま、わしも若いときにはそう訳してみたこともあるが』と言われ、ぼろぼろになりかかった大学ノートに書かれた『実証』が出現して、またまたこちらは顔色がなくなるという風だった。なにしろリデル・スコット（『希英大辞典』）にこうありますと言おうが、キューナー（『詳解ギリシア語文法』）ではしかじかですと申告しようと、『いや、それらはこの解釈からの成れの果てじゃよ』と、まことに当然の理で抑えこまれてしまうわけだから、若輩の歯がたつわけがない¹³⁶⁾。」

およそ20年後の1968（昭和43年）年から1973年（昭和48年）にかけて、岩波書店から出隆と山本光雄^{もとみつお}¹³⁷⁾の監修のもと、『アリストテレス全集』全17巻が出版されるが、その訳者の多くはこの講読会から育っている¹³⁸⁾。井上も訳者の一人である¹³⁹⁾。

こうして、法学部を卒業し文学部へ移った井上は「全然見知らぬギリシア語の天地に入っていて、〔…〕全然わからないまま卒論を書いた¹⁴⁰⁾。」これは、哲学科3年生の井上（24歳）が1950年（昭和25年）12月に出隆教授に提出した卒業論文「アリストテレス形而上学研究」のことである¹⁴¹⁾。

2 ^{もりありまさ} 森有正との対話

文学部哲学科の学生だったときの大きな出来事として森有正¹⁴²⁾との対話¹⁴³⁾がある。森は当時、東京

134) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 3.

135) 今道友信『知の光を求めて』p. 68.

136) 井上忠「先生と『新理論』」出かず子編『回想出隆』pp. 284-285.

137) 山本光雄（1905～1981年、東京都立大学名誉教授、古代ギリシア哲学）。

138) 今道友信『知の光を求めて』pp. 68-70. なお、出隆の自宅での『形而上学』講読会は少なくとも1955年（昭和30年）ころまで続いた（今道友信「出先生の本領」『出隆著作集 月報7』勁草書房、1963年、p. 4）。その後、東京都立大学で毎月1回、山本光雄を中心に「アリストテレス研究会」が長期にわたって開かれ、『アリストテレス全集』のための各人の訳の検討がおこなわれた（山本光雄「訳者解説」『アリストテレス全集1』岩波書店、1971年、p. 165. 戸塚七郎「想い出すままに」『回想出隆』pp. 279-280）。

139) 1971年（昭和46年）に公刊された「分析論前書」（『アリストテレス全集1』）。

140) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」p. 19.

141) 井上忠「おわりに」『挑戦』p. 328.

142) 森有正（1911～1976年）。

143) 井上忠「推理劇風の舞台の上で」『刻み3』pp. 30-33. 森との対話に関して以下に引用する井上の言葉はすべてこの随筆からである。

大学文学部仏文科の助教授であった。戦後はじめてのフランス政府給費留学生として、1950年（昭和25年）8月下旬に日本を出てフランスに渡った。留学は1年間の予定だったが、1年経っても帰国せず、結局、森は、東京大学を辞職し、1976年（昭和51年）64歳で亡くなるまでフランスに留まった。その間に、フランス文化、ヨーロッパ文化、そして、経験と文化の関係について、多くのエッセイを日本に書き送ってきた。

森は1944年（昭和19年）以来、東大YMCA会館（東京都文京区）に住んでいた¹⁴⁴⁾。東大YMCA会館は「東京大学学生キリスト教青年会寮」とも呼ばれ、東大の学生のうちキリスト教の信者および信者を目指す者を受け容れる寮である。森が渡仏する1950年（昭和25年）当時、哲学科3年生の井上も東大YMCA会館に住んでいた。3階の階段をはさんだ隣同士だった。井上は言う。

「森先生の『パスカル研究』〔の授業〕は〔…〕第一時限で、その朝は必ずわたしが『たたき起こし』にくるよう命じられていて、わたし自身が寝坊しないときには、忠実に命令を守った。先生は恐らくいつも二、三時間位しか眠っておられなかったような気がする。」

森が渡仏する直前、二人は夜を徹して語り明かしたことがあった。森39歳、井上24歳である。

「わたしがちょうどカトリズムに魅せられていたところで、話題は、信仰の真理性から聖書解釈の根拠へと〔…〕わたしは渾身の思いを奮い起こして森さんに喰いついた。夜が白々明けるころには、どこでどう話が進んだのか、森さんの方には、『神』も『聖書』もなんら持ち駒にならなくなって、客気満々たるわたしは内心〈勝った〉と思った。〔…〕もはや『信仰』も『神』も『聖書』も持ち駒としては失っていた森さんが、最後に唯一の根拠にしたものは何だったか。では、先生は、結局何によって御自分の途をただしとされるのですか？ ついに最後の一手と思いきや振りおろしたわたしの一撃に対して、森さんの口から、まるで胡桃^{くるみ}がばかりと割れるように予期しない言葉がとび出した。『ええ、それは、ぼくには、哲学なんですよ。ええ』。〔…〕あのとき森さんはたしかに『キリスト』よりも確かなものとして、ただ『哲学』を見ていた。」

これがふたりの対話である。しかし、当時の井上は森の言葉を理解できなかった。

「まだ『思想』や『信仰』の眼を奪う絢爛さに溺れていたわたしには、森さんのその一言は、むしろ敗北や絶望の言葉のごとく異様にひびいた。不遜にすら感じられた。そしてわたし自身が、あの暁の一言を、まったくなんのけれん味なく了解するには、その後の長い年月の歩みが必要だった。」

井上は当時の自分のことを、「まだ、勉強することの意味さえ分からず、自分が奉ずる思想内容や信仰内容がそれ自体でなにか意味があるような錯覚に浸りきって、どの思想が、どの主張が真なのかをあちこち求めまわる無知な青年の一人にすぎなかった」と言う。

しかし、この夜の森の態度から感銘を受けたことが一つあった。それは議論の中で森が一度も「待った」をしなかったことだ。

「さきほどはああ言ったが、あれは実はこういう意味で、といったふうな弁解が一度もなかった。森

¹⁴⁴⁾ 伊藤勝彦『森有正先生と僕』新曜社、2009年に掲載されている「森有正年譜」p. 209.

さんは自分が提出した定言から、二人がかりで引き出した結論をその都度全面肯定し、いささかの保留もつけなかった。そして最初御自分の論拠のごとく提示されていた一つ一つの概念が粉碎されても、それが二人の討論吟味の結果であるかぎり、新しく出現した定言だけを守り、そこからまた二人がかりの吟味をつづけえたのである。〔…〕わたしは大学に学んで、後にも先にも、これほど誠実で力強く爽やかな師との出会いを経験したことがない。」

森のこの態度は、井上にとって、哲学的対話の模範となるものだったのだろう。

3 カトリックへの改宗

18歳のときの神秘体験のあと、呉に帰省した際プロテスタントの洗礼を受けたことは前述した（第I節「誕生から旧制一高生時代まで」第4項「神秘体験」）。しかし、前項「森有正との対話」で述べたように、森と対話したのは、井上が「ちょうどカトリシズムに魅せられていたころ」だった。いつ、井上はプロテスタントからカトリックに変わったのか¹⁴⁵⁾。

22歳で文学部に入ったあと、井上は上智大学のホイベルス神父¹⁴⁶⁾と出会った。そのときの体験を田中小実昌にこう語っている。

「ホイベルス神父さんは〔…〕小さな司祭館にいたんだけど、とにかくその部屋に入ったとたんに、世の中の騒がしさが一ぺんに消える。ともかくホイベルス神父さんがそこにいるだけで、本当に千古の静けさというのがあった。世間の騒音が全部消えて、すごく静かな、なにも騒ぐ必要のない天地があった。そこでぼくのことだから、早速、カトリックになっちゃった¹⁴⁷⁾。」

ホイベルス神父はドイツ生まれのイエズス会¹⁴⁸⁾の宣教師で、1923年（大正12年）に33歳で来日して以来、1966年（昭和41年）まで43年間上智大学の教授を務めた。そして、日本に住み続け1977年（昭和52年）に87歳で亡くなった¹⁴⁹⁾。また、1941年（昭和16年）以来、^{きおいかい}紀尾井会すなわち旧制一高のカトリック研究会の指導司祭も務めていた。紀尾井会は終戦前後に一時中断したが、戦後すぐに復活した¹⁵⁰⁾。

井上は文学部に入学したあとに¹⁵¹⁾、紀尾井会に入会したようである¹⁵²⁾。ホイベルス神父に会ったのは文学部入学後で森有正の渡仏より前である。したがって、1948年（昭和23年）4月から1950年（昭

145) 森有正の父親は牧師であり、森はプロテスタントであった。しかし、森が在学した暁星（ぎょうせい）小学校（6年間）と旧制の暁星中学校（5年間）はカトリックの学校だったから、森は両方をよく知っていたようである（森有正『生きることと考えること』講談社現代新書、1970年、pp. 23-33）。

146) Hermann Heuvers (1890～1977年)。

147) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」p. 18。

148) 16世紀に設立されたカトリックの修道会。海外布教に熱心であり、日本にはじめてキリスト教を伝えたザビエルも創立メンバーの一人である。

149) 森緑編『ホイヴェルス神父を語る』中央出版社、1977年。

150) 一高同窓会『向陵誌 駒場篇』1984年、pp. 1344-1346。なお、「紀尾井会」の名称は上智大学の所在地である東京都千代田区紀尾井町に由来する。

151) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」pp. 17-18。

152) 一高同窓会『向陵誌 駒場篇』p. 1348に掲載されている「紀尾井会の主な一高会員」という名簿に「今道友信」「星野栄一」「井上忠」の名前が記されている。

和25年)8月の間、すなわち、哲学科1年から3年の夏の間だと推定できる。このとき、井上は22～24歳、ホイベルス神父は58～60歳である。ホイベルス神父に魅了された¹⁵³⁾ことが、カトリックに改宗した一番大きな理由だと思われる。

その後、井上は生涯カトリック教会に留まり、2014年(平成26年)10月8日に行なわれた井上の葬儀の会場はカトリック^{きちじょうじ}吉祥寺教会(東京都武蔵野市)だった。

井上の著書にはしばしばキリスト教への言及が現れる。とりわけ16世紀スペインの神秘思想家である十字架のヨハネ¹⁵⁴⁾は共感を持って言及されることが多い¹⁵⁵⁾。しかし、キリスト教会への厳しい批判を述べることもある。たとえば、「作品の途の刻みとしての愛の現前を見喪ったとき、プロテスタンティズムは、聖書フェティシズム」に陥り、他方、「カトリシズムにおける全体もどき〔一般者〕と全体〔根拠〕との混同も許さるべきではない」と述べている¹⁵⁶⁾。井上哲学がキリスト教とどのように関連するのかは、判断が難しい問題である。

4 最初の論文の完成

井上は卒業論文の執筆に苦しんでいた学部3年生(1950年昭和25年)のころ、親友の加藤信朗¹⁵⁷⁾の自宅(東京都世田谷区下北沢加藤医院)に約1年間住んだ¹⁵⁸⁾。加藤は旧制成蹊高等学校(東京都武蔵野市)の出身で、井上と年齢は同じだが、哲学科での学年は1つ上である。既に1年前に卒論「アリストテレス『形而上学』Z Hの研究—本質(τὸ τί ἦν εἶναι) 概念を中心にして—」を書き終え¹⁵⁹⁾、大学院に進んでいた。二人は毎日、毎晩のように、親しく語り合った¹⁶⁰⁾。井上は最初の著書『根拠よりの挑戦』の「おわりに」で、加藤について、「われらふたりのディアレクティケー〔対話〕なくしてわが哲学の途はなかった¹⁶¹⁾」と書いている。井上にとって、哲学を進めていく上で加藤との対話が大きな助けになった。

井上は田中小実昌との対談で、「カトリック好きなら出ていけて、YMCAを追い出された」と語っている¹⁶²⁾が、森有正と対話した文学部3年生のときにカトリックの洗礼を受け、東大YMCA会館を出ることになったようである。そのとき、加藤の父親が「うちに来ればいい」と言ってくれたので、1950年(昭和25年)の夏頃から1951年(昭和26年)の夏頃までおよそ1年間、加藤の家に住むこと

153) 71歳で執筆した論文(「続・十字架のかなたに」『究極』p. 236)においてもホイベルス神父のことを「思い起こすだけに空気が透明になるようなお人柄」と書いている。

154) 十字架のヨハネ(本名フアン・デ・イエバス・アルバレス、1542～1591年、スペインのカトリック司祭)。

155) 十字架のヨハネへの言及箇所は次のとおり。『性と死を超えるもの』序曲『刻み1』p. 44(執筆時38歳)。「死者は甦る」『刻み1』p. 142(執筆時39歳)。「聖書の言語」『超言語』pp. 258-266(執筆時65歳)。「活勢言語と地平設定機能」『究極』p. 33(執筆時67歳)。

156) 井上忠「死者は甦る」『刻み1』p. 111。

157) 加藤信朗(1926年～、東京都立大学名誉教授、古代ギリシア哲学)。

158) 井上忠「加藤信朗氏『哲学の道』に懐う」『創文』1997年10月号、p. 10。

159) この卒論を1949年(昭和24年)12月に出陣教授に提出し、出陣教授、池上謙三教授、岩崎武雄助教授から審査を受けた(加藤信朗談)。なお、「τὸ τί ἦν εἶναι」は「ト・ティ・エーン・エイナイ」と読む。

160) 加藤信朗談。

161) 井上忠「おわりに」『挑戦』p. 330。

162) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」p. 18。

になった¹⁶³⁾。

卒業論文「アリストテレス形而上学研究」をなんとか完成させ1951年（昭和26年）3月に文学部を卒業した井上（25歳）は、大学院へ進んだ。そして、1年目の夏頃、終の棲家となる東京都練馬区立野町のちやう野町に引っ越した。17歳で広島から東京に出てきて以来、9回目の転居¹⁶⁴⁾だった。

そのころ、井上はモーリアック¹⁶⁵⁾のいくつかの小説を読んだが、それら（特に『夜の終り』）は存在の神秘への生きた眼を開かせてくれた。

「その時以来私の心奥深く、一切の騒音の消える、一つの不思議な世界が開けた。〔…〕哲学の言葉によってはそれほど存在把握を表現出来そうもないことが耐え難い羞恥に思われた¹⁶⁶⁾。」

また、その年（1951年度昭和26年度）の冬、鎌倉の神奈川県立近代美術館にルオー¹⁶⁷⁾の「ミセレーレ版画展」を見に行ったときも同じ羞恥に襲われたと言う¹⁶⁸⁾。このときのことかどうかは不明だが、加藤と井上の中で、「ルオーの作品に見る道化のある顔とキリストのある顔は、同一ではないか、と加藤信朗氏が言う。キリストは傷つき倒れたのだから、ぼくたちは、ただ、倒れたキリストを、担いでゆくだけだ、とわたしが答える」という会話があったと言う¹⁶⁹⁾。

また、井上は、大学院生のとき、出隆のアリストテレス『形而上学』講読会とは別に、山本光雄が自宅で開いたプラトンの読書会にも参加していたようである。山本は1955年（昭和30年）に出版する『世界大思想全集1 プラトン 国家』（河出書房）のためにプラトンの『国家』を翻訳していた。山本によれば、「都立大学の演習にテキストとしてこれを使用し、またその頃毎日曜日私宅で催していた読書会でもこれを読んだ。この読書会には、村治能就¹⁷⁰⁾、戸塚七郎¹⁷¹⁾、泉治典¹⁷²⁾、井上忠、加藤信朗¹⁷³⁾、大沢新一、本橋正義など、私が教授として、あるいは講師として、一緒にプラトンを勉強した諸君が出席して、たいへん賑かであった¹⁷⁴⁾」そうである。

井上は、大学院に入ったあと3年かけて、卒論を何度か書き直し、雑誌論文の形にまとめあげた。大学院3年目（27歳）の1953年（昭和28年）7月にこう述べている。

「私はここ数年間の、正確に云えば東大の哲学科に入って以来の憂鬱極まる文献学的な勉強を整理し

163) 加藤信朗談。なお、森有正が渡仏したのは1950年（昭和25年）8月であり、井上は「森さんが渡仏される日も間近な一夜、徹夜して二人で語り明した」と書いている（井上忠「推理劇風の舞台の上で」『刻み3』p. 31）から、そのころまで東大YMCA会館に住んでいたのは間違いないであろう。

164) 井上忠「武蔵野雑感」『刻み4』p. 179。

165) François Mauriac (1885～1970年、フランスのカトリック作家)。

166) 井上忠「武蔵野雑感」『刻み4』p. 182。これは大学院3年目（27歳）のときに書かれた文章である。

167) Georges Rouault (1871～1958年、フランスの画家)。「ミセレーレ版画展」は1951年（昭和26年）12月4日から1952年（昭和27年）1月15日まで神奈川県立近代美術館で開催された。

168) 井上忠「武蔵野雑感」『刻み4』p. 182。

169) 井上忠「死者は甦る」『刻み1』p. 138。

170) 村治能就 (1912～1976年、東京教育大学教授、古代ギリシア哲学)。

171) 戸塚七郎 (1925年～、東京都立大学名誉教授、古代ギリシア哲学)。

172) 泉治典 (1928～2011年、東洋大学名誉教授、古代ギリシア哲学・スコラ哲学・聖書学)。

173) 上妻精 (1930～1997年、東北大学名誉教授、ヘーゲル哲学)。

174) 納富信留『プラトン 理想国の現在』慶應義塾大学出版会、2012年、p. 158による。

て、その間の思索に一応の纏り^{まとま}をつけようと努力していた。古典ギリシアの哲学、特にプラトンとアリストテレスの偉業への沈潜を経て、漸く『存在』の光輝^{ようや}が、未だ人の言葉に汚されぬ神秘な新鮮さに溢れつつ、苦しい模索の暗夜への一条の希望の光となって注ぎはじめたからである¹⁷⁵⁾。」

こうして、井上の最初の論文「アリストテレスの『有』把握¹⁷⁶⁾」が完成した。哲学科に入学しギリシア語の地面を這い進み始めてから5年経っていた。一高2年生のときの神秘体験からだ9年経っていた。

論文が完成したとき、井上はこの9年間でひとつにつながるのを感じた。

「たんにわたしの言葉ではなく、曲がりなりにでもアリストテレスの鍛え上げた硬質な言葉で、ものを言う仕方を覚えていた。卒業論文をなん度か書き変えて、漸く一つの纏りが出来てきた。その最後の一行を書いたとき、コトリとなにかが外れて扉が開いた。扉の向こうには十九歳の時にニーチェ、キルケゴール風幼児語でしか語れなかったわたし自身が立っていた！ 九か年の星霜を経て、そのむかしわたしが出遭っていた自分自身の地点へ、公共に通用する言語を身にまとして帰ってきたわけである。いわば透明のガラス戸を通り抜けようとして徒にぶんぶんと頭をぶつけることしかできなかった^{あぶ}が、迂回してちょうど自分が頭をぶつけていたその場所へ帰り、その場所から旧いおのれの軌道を延長しはじめた、とでも言えようか¹⁷⁷⁾。」

そのとき、「ああよかった、体験したこともよかったし、ギリシアをやったこともよかった、どちらもウソじゃなかった」と感じたと言う¹⁷⁸⁾。18歳のときの神秘体験も、哲学科に入りなおしてギリシア哲学をやったことも、どちらも「ウソ」ではなかった、と言うのである。

また、井上はこのような述べている。

「その最後の一行を書いた時にびっくりしたのは、その十八の時に置き捨てにした問題がピシャッと出てきた。〔…〕もし本当の問題なら消えることあるまいと思ってよそへ行った。〔…〕で、アリストテレスをやって帰ってきてみたら、ちょうど十八の時にぶつかってぶんぶんやってもどうにも進めなかったところへ、透明のガラス戸のちょうど向こう側のそこへ出てきた¹⁷⁹⁾。」

「十八の時に置き捨てにした問題」とは、18歳のときの神秘体験において自分が出会ったのは何だったのかという問題である。「十八の時にすごい体験はしたけれども、当時はそれを言葉にしようとしたってどうにもならな〔かった〕¹⁸⁰⁾」と井上は言う。しかし、初めての論文を完成することによって、「自分が何に出会っていたのか。そういうことに対する、とにかく幼いながらもひとつの描写ができる〔…〕。かつてキルケゴール流の絶叫でしか言えなかった神の語りを、アリストテレス型に鑄直した¹⁸¹⁾」のであ

175) 井上忠「武蔵野雑感」『刻み4』p. 180.

176) 翌1954年(昭和29年)3月に、哲学会編『哲学雑誌』第68巻、第719・720号に掲載され、のちに『挑戦』pp. 225-260に再録された。

177) 井上忠「一冊の本」『刻み4』p. 7. なお、井上の神秘体験は満年齢で18歳6カ月のときである。

178) 「対談 宗教—その『根拠』を問い直す」p. 19.

179) 「対談 体験が言葉に変わる時」p. 32.

180) 「対談 体験が言葉に変わる時」p. 30.

181) 「対談 体験が言葉に変わる時」p. 33.

る。だから、井上は、「神に出会うのは易く、神を語るは難しい¹⁸²⁾」と言う。

「それを神と初めから呼んでいいかどうかはわからないけれど、とにかく我々が生きている時に会おうその最後の謎みたいなものですね、それを仮に神と呼びましょう——それに会いたいと思ったら、ただそれに会いたいということだけに集中する。そしてそれ以外のことは一切やめるといことです。〔…〕寝てはいけない、食ってはいけない、もちろん酒なんぞ飲んではいけないということです¹⁸³⁾。」

これは18歳のときの井上自身の体験である¹⁸⁴⁾。しかし、井上は言う。「なにかを体験するのはやさしいが、それが本当は何かを言葉で明らかにする、そのいみで見るのは難しい¹⁸⁵⁾。」だから、18歳のときに体験したことが本当は何であるかを言葉で明らかにすることは、体験した当時はできなかった。

27歳で完成した最初の論文の結論は、「形式的にはあくまでも超越的な一つの神、しかし、実質的にはそれはすべて現に目の前に出会っているこの一つのものに全部表出されてくる¹⁸⁶⁾」ということだった。この結論に達した時、「そうなんだ、あの時やっぱりこれが見たかったんだ」と納得したと言う¹⁸⁷⁾。つまり、9年前の神秘体験をアリストテレスの硬質の理論言語を使って捉えることが可能になったと言うのである。

「稚拙ではあるが、それは少年の日の絶望から、硬質な言葉の明るみへわたしを解放し、わたしに哲学の基本柱を与えた¹⁸⁸⁾。」

こうして、27歳の井上は「やや哲学というものに対して自信を持ちはじめ、哲学の道を登りはじめた¹⁸⁹⁾」のである。

謝辞

本論文執筆の際、加藤信朗氏（東京都立大学名誉教授）、山本^{たかし}巍氏（東京大学名誉教授）、^{のうとみのぶる}納富信留氏（東京大学教授）から貴重な情報をご提供いただいた。記して感謝申し上げたい。

文献略称表

本論文では以下の略称を用いる。

『挑戦』：井上忠『根拠よりの挑戦——ギリシア哲学究攻』東京大学出版会、1974年。

『現場』：井上忠『哲学の現場——アリストテレスよ 語れ』勁草書房、1980年。

『刻み1』：井上忠『哲学の刻み1 性と死を超えるもの』法蔵館、1985年。

『刻み2』：井上忠『哲学の刻み2 言葉に射し透されて』法蔵館、1985年。

182) 「対談 体験が言葉に変わるとき」 p. 37.

183) 「対談 体験が言葉に変わるとき」 pp. 20-21.

184) 前述の第1節「誕生から旧制一高生時代まで」第3項「自己の問題と絶望」および第4項「神秘体験」を参照せよ。

185) 「対談 体験が言葉に変わるとき」 p. 37.

186) 「対談 体験が言葉に変わるとき」 p. 33.

187) 「対談 体験が言葉に変わるとき」 p. 33.

188) 井上忠「おわりに」『挑戦』 p. 328.

189) 「対談 体験が言葉に変わるとき」 p. 33.

- 『刻み 3』：井上忠『哲学の刻み 3 知の階段を昇りつつ』法藏館，1986 年。
『刻み 4』：井上忠『哲学の刻み 4 運命との舞踏』法藏館，1986 年。
『モイラ』：井上忠『モイラ言語——アリストテレスを超えて』東京大学出版会，1988 年。
『超言語』：井上忠『超 = 言語の探求——ことばの自閉空間を打ち破る』法藏館，1992 年。
『パルメニデス』：井上忠『パルメニデス』青土社，1996 年（新装版 2004 年）。
『究極』：井上忠『究極の探究——神と死の言語機構分析』法藏館，1998 年。
『追悼集』：『井上忠先生追悼集』井上忠先生追悼集刊行委員会，2014 年。